慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	原始基督教と共産主義的思想（上）
Sub Title	
Author	三邊, 金蔵
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1923
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.17, No.1 (1923. 1) ,p.59- 69
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19230101-0059

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

長輩は叛きて盜人の伴侶と爲り、各々賄賂を喜び、贓財を追ひ求め、孤子に公平を行はず、寡婦の訟は彼れ等の前に出づること能はず。」（同第一章第二十三節）。ヱホバは其の民の長老と諸君主とを裁きて言はん、「汝等は葡萄園を喰ひ荒せり。貧しき者より掠め取りたる物は汝等の家に在り。如何なれば汝等我が民を蹂躙り、貧しき者の面を磨り碎くや」と。（同第三章第十四、五節）。貧民、寡婦及び孤兒は抑壓せられ强搾せられ、小農民は其の所有地を剝奪せられて、大財産は形成せられる。「禍ひなるかな、彼れ等は家に家を建て連ね、田圃に田圃を增し加へて、餘地を剩さず、己れ獨り國の中に住んとす」。（第五章第八節）。イザヤは烈しく「不義の掟てを定め、暴虐の言葉を錄す者」、「乏しき者の訴訟を受けず、貧しき者の權利を剝奪し、寡婦の資産を奪ひ、孤兒の所有を掠むるものを糺斷する。神は總べて昂ぶる者を低下し、驕る者を屈し、唯だ自己のみを高く揭げんとする。（同第二章第十一節）。神の支配は即ち正義の支配である。神の審判の下る時、謙讓なる者はヱホバによりて其の歡喜を增し、貧困なる者はイスラエルの聖者によりて快樂を受くる。暴戾なる者は亡せ、邪曲の機を窺ふ者は悉く滅せられる。萬軍の主ヱホバは公平によつて崇められ、聖なる神は正義によつて聖とせられる。

雜錄

原始基督教と共産主義的思想（上）

三邊金藏

（左の一篇はマックス、ベエヤの「古代に於ける社會鬪爭」中より其最後の章を抜けるものにして、共産主義的思想を原始基督教の中に指摘せる點に興味を覺えたるが爲めなり。讀者の中に更に詳細なる研究を企つる者出でんならば、余輩がベエヤに對し拙譯を以て其金玉の文を汚したる罪は蓋し償はれて大に餘る所あらん也。）

一、キリスト前のパレスタイン

基督紀元に先立つ二世紀間に於て猶太人の政治的及び道德的狀態は極めて悲劇的となつた。バビロン追放より歸つて後、猶太人は一個の宗教的社會を形成した。其政治は神政的であつたが、併しパレスタインは政治的には初めはペルシャ帝國の下に、次にはマセドニヤ帝國の下に重要ならざる一地方を形くつて居つたのであつて、マセドニアの滅亡後は更にシリアの一部となり、猶太人を漸次に希臘化せるセルキデイア人の治下に在つたのである。然るに其後アンテイオチユス、ヱピファネスが强いてヱホバ神崇拜を根絶せしめんとして多數の殉教者を出すに至るや、此國の敬虔なる住民はこれに背叛して立ち、シリアの攻擊軍を破りて終にユダス・マッカベエスの下に政治的獨立を獲得したのであるが、此數年間に於ける非常なる屈辱と不可思議なる救濟とは又た非常に猶太教に對する信仰を强くしたのであつて、帝國主義者の世界王國の破滅と猶太人の支配の下に神の王國出現す可し

と豫言し「その餘の獸はその權威を奪はれたり〜る。彼等は爲政家的實際的政治家であつて猶太人の世界統治と云ふが如き思想は不可能であり滑稽であると爲したのである。而して彼等は僅少なる少數黨であつた。

……而して見よ彼處に人の子の如きもの天の雲に乘りて來りぬ、彼は日の老ひたる者の許にすら來りぬ、……而して國と權と天下の國々の勢力とは皆至高者の聖徒たる民に歸せん、至高者の國は永遠の國なり」と說ける彼の但以理書は實に此時代に書かれたるのである。即ち掠奪的なる帝國主義者の王國の代りに、正義の王國猶太人の支配の下に建設せらる可しと云ふが其理想であつたのである。

閑話休題、猶太民族はマッカベエ家を奉戴して其統治に服して居つたのであるが、彼等はサドカイ人、パリサイ人及びエセニア人の三派に相分れて居つたのである。就中サドカイ人は貴族たる僧侶と希臘主義に傾ける其他の敎育ある人々とより成つて居つたのであつて特に猶太人の使命と云ふが如きものを信じなかつたのである。

パリサイ人は嚴格なる猶太の律法を遵守せる中流階級より成れる者であつて、其理想とする所は猶太人は神の聖き民となり、神に事ふる國民となる可きであると云ふことであつた。從つて國民的感情と宗敎的感情とは此パリサイ人の間にありて最も緊密に結合して居つたのである。

エセニア人は一切の國民的及び國家的目的物を外にして、一向に道德的純眞なる人道　國家若くは强制なき神の王國、政府又は祭司達より出づる掟なき神の王國、社會の爲めに社會的課業を任意に遂行することが唯一の奉仕たる可き神の王國、のみを渴仰せる猶太人の一小部分であつて、一切の黨派的爭鬪と、一切の權勢に對する熱望とより超越し、從つてサドカイ人とパリサイ人との間に行はれたる爭鬪の爲めに毫も煩はさるゝことなきものであつた。

却說猶太の政治的獨立は約一世紀間連續し、其間に國民の經濟的生活は旺盛となり、農業は榮え、手工其他の產業は尊重せられて博士、學者達の如きも、其生存の基礎として肉體的勞働をなすを以て一個の義務と爲すに至つた。即ち中流階級の下層部の節約と勤勉と敬虔と德行とは當時に於ける一般の感情であつたのであるが、此事情は程なく變化するに至つた。蓋し基督紀元に先立つ六十三年に於てポンペイはシリヤを征服し、パレスタインに侵入し、エルサレムに於て祭司上の爭鬪盛んなる其眞最中に羅馬の軍隊はエルサレムの市を襲ひて、ポイペイは宮殿の中の至聖所中の聖所に這入つて仕舞つたからである。而して其時以來猶太の獨立は失はれ、猶太の王は羅馬の從屬者となり、羅馬の方伯は或は徒黨叛亂に依り或は消極的拒否に依りて羅馬の壓制に對して餘憤を漏す猶太人の上に貢を課するに至つたのである。が併し他方に於ては來る可き神の王國に對する古き望は之と共に更に熾烈に燃え出でたのである。豫言者の豫言は虛妄なりしか？猶太敎は艱難の頂上に於て神の誡を守らざりしか？殉敎者の血は徒に流されしか？否、々！救世主、神によりて膏抹られたる王、嚮て來りて此世の支配を必ず其掌裡に收め給ふ可し！とは彼等當時の信仰であつたのである。斯くて輿望を負へる指導者は輩出し、幾多の新しき黨派は形くられ、全國は鼎の沸たるが如き狀態となり、國民は社會的に四分五裂したのである。路加傳第一章五十一節乃至五十三節に、イエスの母マリヤが自らの姙娠せるを見て神を頌めて「彼は心の驕れる者を散し、權

柄ある者を位より下し、卑賤者を擧げ、飢えたる者を美食に飽かせ、富る者を徒く返らせ給ふ」と云へるは、當時に於ける一般の感情をよく表示して居るのである。

何れにせよ、當時の猶太は最も崇高偉大なる國民的及社會的感情の燃え立つ一個の火爐であつたのであつて、重き壓迫の加はり驚天動地の政治的事件の發生するが儘に、時は滿てり、神の國は近けり、救主の降臨は遠からず、と云ふ信念は猶太の歷史に屢々之を見るが如く愈々益々彼等の間に普及したのである。

二、イエス

「是は權勢に由ず能力に由ず我靈に由なり」

（ゼカリヤ書四章六節）

斯の如く白熱化せる雰圍氣の裡にイエスは現はれたのである。

人の注意を惹き、何人も彼の爲人に無關心なるを得ざらしめた。彼は到る所に於て世人の耳目を聳動せしめたのである。多くの人は彼に於て羅馬に對する自由戰の未來の指導者を認め、當時恰も準備中なりし謀反の一つに對し彼の支持を受けんと努めたのである。蓋し彼等は神の彼に賦與するに斯の如き偉大なる資性を以てせる目的は是以外に在る能はず、神の痛く壓制せられたる民を自由ならしむる以上に喜ばしき目的他に在ると能はずと思惟したからである。

而して初めは彼イエスも此誘惑に動かされたる所なかりしにはあらざるが如く思はるゝのである。蓋し國民の熱情は羅馬に對する自由戰の爲めに烈火の如くに燃え幾多の純潔なる人々に燃え移りて之が爲めに起つに至らしめたるに、彼のみ獨り此例に漏るゝは道理に於て在り得可からざることであるからである。而して彼の「地に泰平を出さんとに非ず、刀を出さん爲めに來れり」と謂ふ言は、恐らくは彼の國人との此少時の一致協同時代に發せられたるものと見る可きであらう。蓋し其は其が馬太傳（十章三十四節）中に置かるゝ其後の時代とは全く相合はぬからである。

が併し、イエスは漸次に別個の考へに向つて進んだ、――刀に依りてにあらず、强力に依りてにあらず、唯だ靈なる手段と平和なる手段とに依りて、犧牲と內心を潔むることゝに依りて、猶太も羅馬も其に惡より贖はる、現世の權力は惡より出づ。

是に至て叛亂の全計畫は、彼の目には惡魔の誘惑として映じた。彼は四十日四十夜荒野に於て之と苦鬪した。我等若し羅馬を破りて其全國と其榮とを得たりとせんか？然らば其は果して手工業者の家に生れ、其村の猶太人の學校に學び、猶太人の會堂に於て說敎を聽き、每年逾越の節筵にはエルサレムに上るを常とした　蓋しエルサレムは猶太人の緊張せる精神生活の中心であつたからである。

イエスの心の向ふ所は夙くも明かになつた。彼は一靑年としてすら彼の國人の激烈なる毀譽褒貶の蝟集裡に在つたのである。彼は以賽亞書を好み「主の靈われに在す、故に貧者に福音を宣傳ん事を我に膏を沃ぎて任じ、心の傷る者を醫し、又囚人に釋ん事と、瞽者に見させん事を示し、又壓制らるゝ者を縱ち、主の禧年を宣傳んが爲めに我を遣せり」（路加傳四章十七節乃至二十節）と云ふ驚く可き箇所を讀み上げたのである。

彼の生涯は斯く如き序幕を以て始まり、而し

何ぞや？之に換へてパリサイ人の王國、人間の律法と祭司の掟との國を得たりとせば、人類は果して何等かの得る所ありや？否！「主たる爾の神を拜し唯之にのみ事ふ可しと錄されたり。」而して神意の何たるかは豫言者に依りて人類に告げ知らされて居る。社會的正義と貧者の贖ひ、富の蔑視と審判、一切の强制の廢止、總ての人に對する愛、其中に神の國を宿し、其靈の命の中に神の國を宿す人道——是れぞ神の國の奧義である！

斯くて一切の革命家と國家主義者とは彼を棄てた。乍併素朴なる人々は彼の周圍に群り來つた。彼は支持者と弟子を得た。而して多くの人々の彼の周圍に集り來るを見て、山に登り、口を啓きて次の如く敎えたのである。

「貧しき者、哀しむ者、柔和なる者、矜恤ある者及び和平を求むる者、義ことの爲めに責めらるゝ者は福なり。惡に敵することなく、却つて惡に報ゆるに善を以てする者は福なり。審判所を有たず、刑罰の掟を知らずして、其敵を愛しみ、其虐遇迫害る者の爲めに禱る者は福なり。總の人々は天に在す一人の父の子なればなり。神の國の來らんことを希ひ、神の御意の成らんことを希ふ。彼の國は永遠の國、永遠の權力永遠の榮光なればなり」

イエスは其の腹心の友に告げて次の如く言つた。曰く、政治上の爭鬪、革命的叛亂、國民的戰爭、虐殺頓死、法律の改正、國民的自治等の如きは、古の豫言者の理想を實現する上に於て寸毫も汝を補助するものにあらず。神の國は現世（コノ）の國にあらず——神の國とは猶太人が諸民の上に支配を得、其上に權力を有することの意にあらず、其は他の國民に勝りて多くの富を貯ふることの意にあらず、其は殿の禮拜を守り若くは會堂の儀式に遵ふの意にあらず、其は祭司の潔め、審判所の訓令に從ふことの意にあらず、其は愛國的利害に敏にして國威を宣揚することにもあらず。是等は總て一時的のものなり。神の國とは寧ろ限りなき人類愛の基礎の上に生命全體の再生の意である、——總ての弱き者、迷へる者に對する愛と親切、一切人に對する無極の同情、あらゆる階級差別の消失、一切の爲めに共同に勞作すること、是等のみが永久不滅であつて惡より人類を救ふものである、而して之れが即ち神の國であると。

イエスは猶太民族の豫言的發達の靈的結晶であつた。彼の感化は誓つて反國民的であつた、而して猶太官憲の見解に於ては更に反宗敎的でもあつたのである。彼の宣傳する所は共產主義的であつた。其は後期ストイック派の倫理を、追放期中及び追放期以後に於ける猶太敎の熱烈なる宗敎的修養の結果に依りて潔め、豐かにし、且つ深からしめたるものであつた。希臘人にしてイエスの時に於ける猶太人と同一程度に罪と云ふ意識、神聖と云ふ感情、神に對する畏敬及び神に在りての喜悅と云ふ感情を有つたものは未だ嘗つて一人も無いのである。

而して此の感情こそ即ち猶太人をして羅馬の暴政に叛き多年の間夥しき犧牲を敢てして偉大なる爭鬪を遂行するを得せしめたるものであるが、彼のイエスは更に此猶太敎以上に出でたのである。彼は國民的境界を絕し、幾多の偉大なる先輩に依りて多大なる苦惱と煩悶とを以て建設せられたる傳統的宗敎組織を打破した。彼は平和的であつたが併し又革命的であつた——彼の平和其ものが驚く可き程革命的であつたのである。若しイエスが羅馬に對する國民的叛亂を促進するが爲に彼の人望を利用せしならば、猶

太人は恐くは總てを彼に赦したであらう。彼等は羅馬の支配に對し叛亂を起せるの故を以て十字架に付けらる可かりしバラバの命乞ひをしたのである。併しイエスと彼の弟子とは既に業に彼の馬可かバラバの國民的愛國的行爲を殺人として記せる程爾かく遙かに猶太人の生活より離れ去つてあつた。宗教、政治及び社會的秩序の見地よりすれば、イエスは猶太文明及び羅馬文明の穀中より脫せるものであつて、審判され十字架に付けらる可きものであつたのである。

三、原始社會に於ける共產主義

イエスの直弟子の中には其人格若くは智識に於て自ら傑出したもの、若くは其師の仕事を同一方針を以て繼續し得るものは一人もなかつた。福音書の著者達が其師の生涯中第二義的若くは物語的なる事共を多く傳へて、彼の精神の不朽の心髓を無價値なる外皮中に包める其態度は、彼等がイエスを解せざりし好證左である。イエスが其偉大なる感化力を發揮せる期間、自己の天職を自覺するに至りたる期間は餘りに短くして、爲に有力なる後繼者を訓鍊するを得なかつたのである。而して是等の事情こそ即ち後年保羅に與ふるに基督教の組織者たる役目を演ず可き機會を以てしたのである。保羅は猶太的無產者的思想感情には全くの門外漢であつた。彼は日々に其嵩を增す律法と格式とを履行することの不可能なるを見て心に大に思ひ惱める一パリサイ人、一個の學者であつた。彼が羅馬人に贈れる書の第七章は、猶太の法律の內容と勢力とに關して彼の心中に洶湧せる鬪爭の如何に深甚なりしかを推察せしめて餘りあるものである。而して彼は、此點に於ては、更らに法律は原始狀態より墜落せる人間の腐敗性を表示するものであると云ふストイック派及びノオスティック派の法律觀に依りて影響せられた所ありたるやも知る可からざるのである。併し夫れにも拘らず、彼保羅は學者の理智と良心とを以てして同化し得る限りは悉くイエスの教義を同化したのである。而して彼の全人格と教育とは自ら此教義に獨斷的偏重を與へざるを得ざるに至らしめた。人道に對する溢るゝが如き愛と、無際限なる教義上の熱情と、清淨無垢とを特色とする彼の强き人格は、自ら無產者的及び共同主義的要素を從屬的地位に推し遣つたのである。勿論是等の要素は可なり長い間聖保羅に抵抗したのであるが、併し彼の强き意思と犧牲的宣傳とは終に彼をして勝利を博するに至らしめたのである。新しき教義は共產主義的なる實際に打ち勝つた。而して又た彼が容易に此現世の諸制度を蔑視し、之に遵ふは其勞に値せずと爲し得たるは、彼の他の大なる處世の才、人生の物質的利害より全く超脫せる其出世間の爲めであつた。一期の大事は靈の救濟であつて、此はイエスを信ずるに依りて保證せらる。此信仰を保持し得る機會の存する限り、何人が如何に此世の支配を司らうとも其は一個の無關心事である。

イエスの殉教に次げる數年間に於て、殆んど全く猶太の無產者より成り、共產主義的基礎の上に、若くは又た共產主義的理想を精神として建設せられたる最初の共同體が生じた。彼等は彼等の貧しきに就て誇つて居つた。彼等はエビオン派の人、貧窮者社會的正義の司人であつた。イエスは率直に其弟子に告げて「汝等神と財寶とに事ふること能はず」と宣へり。而して彼等は神に事へんと願へるが故に、財寶に其背を向けたのである。此原始の共同體は共產主義的原則に基きて生活せるか、若くは共產主義的生活方法を渴望したのである。「信者はみな一處に會て

諸物を共にし、産業と其所有を鬻て各人の用に從ひ之を分與へぬ」（使徒行傳二章四十四節四十五節）。「信者はみな心を一にし意を一にして誰一人その所有を己が物と云ふことなく凡て之を共に有り」（同上四章三十二節）。富めるは汚辱なりとせられ、貧しきは神聖なるに近きものとせられた。彼等は總て財寶に仕へ、富有を渇望するは必然的に罪に繫がる、其反對に貧窮は現世的快樂と一時的權力の棄却を意味すと確信して居つたのである。

然るに信者の數の增加と、共同體の普及と、保羅の基督教宣傳と、彼の基督教觀の弘布とは次第に共産主義の勢力を弱め、之に代えて寛大なる施與と慈善的給與とを貧しき兄弟姉妹の爲めに施用することゝなした。而して更に進みては基督教界に階級的差別すらも生じたのである。換言すれば、信者の中に富者と貧者と、雇主と勞働者との別を生じ、昔の同胞的友愛は消失したのである。此階級的對峙は「信仰」と「行」との爭に於て其理論的表顯を見出した。其著者がイエスの教義と保羅の教義とを對照さした雅各書は此鬪爭を反射して居るものである。「人自ら信仰ありと言て若し行なくば何の益あらんや、その信仰いかで彼を救ひ得んや。」雅各書は富める者が彼等の信仰に就て誇り信者の集りに於て特別なる榮譽を請求し、彼等の貧しき友なる信者に對し信者にあるまじき態度に出づること等を記し、而して「此の如く信仰もし行を兼ざるときは乃ち死るなり」と宣言するのである。彼は神が今猶ほ富者によりて凌虐れまた裁判所に曳かるゝ貧しき人を選み給ふことを想ひ起さしむるのである。故に彼は言ふ「富者よ爾曹既に來らんとする禍害を思ひて哭叫ふ可し。爾曹の財は朽ちなんじらの衣は蠹ひ、爾曹の金銀は銹腐れり、此銹證を爲て爾曹を攻め、且つ火の如く爾曹の肉を蝕はん、爾曹この末の日に在りて猶ほ財を蓄ふることをなせり。視よ爾曹が其田を獲せし雇人に予ざる値は叫び、其刈し者の呼聲は既に萬軍の主の耳に入れり」（雅各書第五章一節——五節）。

遮莫、雅各書の愁訴は之を一般化せざるを要す。基督以後の初めの三世紀間に在りては、共産主義的精神は信者の間に猶ほ旺盛であつたのである。基督教の大多數は假令羅馬帝國の法律と制度とに忍從したりとするも、彼等は其正當なるを認めんとせる者ではない。希臘及び羅馬に於ける教父は、少くとも理論上に於ては反政府的教義、と共産主義的教義とを嚴守して居つたのである。彼等は私有財産を非難し、權力、軍役及び愛國に對する國家の請求を否認したのである。

社會思想家としてのジョン・ラスキンの生涯（一）

奥井復太郎

一

Victorian Age は英吉利の發展の最高頂と見る事が出來る。此の時に於いて、更に嚴密に云へば千八百四十年代の頃からして英吉利は其の國家的發展の絶頂に達せんとした。人々が自から謳歌した所のものは國勢の進展であり又所謂社會の進歩であつた。穀物條令が廢止せられては最早英吉利に於いて自由貿易に對する反對の動因は全部なくなつてしまつて茲に自由主義の勝利が確然と樹立された。『千八百四十六年より同六十年に亙る十五年間には Whig 黨及び Gladstone は何等重大な反抗を受ける事なくし